# 5. アイコナールCDCCとその 天体核反応への応用

K. Ogata, S. Hashimoto, Y. Iseri, M. Kamimura, M. Yahiro, PRC**73**, 024605 (2006).

# 天体核物理学の重要課題: S17の精密決定

<sup>7</sup>Be



- ・<sup>8</sup>B太陽ニュートリノは、ニュートリノ 振動パラメータの重要な情報源。
- その流量は、<sup>7</sup>Be(p, y)<sup>8</sup>Bの天体核物理
  因子 S<sub>17</sub>に比例。
  - $S_{17}(E) = \sigma_{p\gamma} E \exp(2\pi\eta)$

要請: S17 (0)を誤差5%以下で決定せよ。

*S*<sub>17</sub>の年表





- ・微細平衡の原理を利用すれば、<sup>8</sup>B分解反応を測定することで、
  逆反応である<sup>7</sup>Be(p,γ)<sup>8</sup>Bの断面積を間接的に決定できる。
- ・この間接測定の結果は、仮定した反応機構が正しいときに限り、 正確である。





間接測定を妨害する要因

- ・核力(強い相互作用)による分解
- ・多段階の分解過程(チャネル結合効果)
- ・E1以外の多重極光子による分解

正確な反応模型による分解反応の記述が不可欠!



 $[T_{\mathbf{R}} + U_p(|\mathbf{R} + 7\mathbf{r}/8|) + U_7(|\mathbf{R} - \mathbf{r}/8|) + h_8 - E] \Psi(\mathbf{R}, \mathbf{r}) = 0$ 

 $\Psi(\mathbf{R}, \mathbf{r}) = \sum_{i=0}^{n} \psi_i(b, z) \frac{1}{(2\pi)^{3/2}} e^{iK_i z} \phi_i(\mathbf{r})$  $K_i = \sqrt{2m_{\mathrm{P}}E_i}/\hbar, \quad E_i = E - \epsilon_i$ 影響は表記から省略。



- ・p+7Beの低エネルギー分解状態 部分平面波(正確にはクーロン入りの波)とみなせる。
- ・<sup>8</sup>Bの基底状態

低エネルギーへの分解断面積に寄与するのは波動関数の テイル(pと<sup>7</sup>Beが十分離れた領域)のみ。関数形は既知。 ただしその振幅は不明。

テイルの振幅 C(漸近係数)を反応解析によって決める。

#### E-CDCC方程式

 $[T_{\mathbf{R}} + U_p(|\mathbf{R} + 7\mathbf{r}/8|) + U_7(|\mathbf{R} - \mathbf{r}/8|) + h_8 - E] \Psi(\mathbf{R}, \mathbf{r}) = 0$ 

左から $\phi_j^*(\mathbf{r})$ を掛けて $\mathbf{r}$ で積分し、 $\nabla_{\mathbf{R}}^2 \psi_i(b,z) \approx 0$ とすると

$$i\hbar v_j \frac{\partial}{\partial z} \psi_j(b,z) = \sum_{i=0}^n F_{ji}(b,z) \psi_i(b,z) e^{i(K_i - K_j)z}$$

 $F_{ji}(b,z) = \langle \phi_j(\boldsymbol{r}) | U_p(|\boldsymbol{R} + 7\boldsymbol{r}/8|) + U_7(|\boldsymbol{R} - \boldsymbol{r}/8|) | \phi_i(\boldsymbol{r}) \rangle_{\boldsymbol{r}}$  $v_i = \hbar K_i / m_{\rm P}$ 

散乱の初期条件  $\lim_{z \to -\infty} \Psi(\mathbf{R}, \mathbf{r}) = \frac{1}{(2\pi)^{3/2}} e^{iK_0 z} \phi_0(\mathbf{r})$ を満たす解は、

反復法等によって求めることが可能。

# 取り入れられている自由度は?

$$i\hbar v_j \frac{\partial}{\partial z} \psi_j(b,z) = \sum_{i=0}^n F_{ji}(b,z) \psi_i(b,z) e^{i(K_i - K_j)z}$$
$$F_{ji}(b,z) = \langle \phi_j(\boldsymbol{r}) | U_p(|\boldsymbol{R} + 7\boldsymbol{r}/8|) + U_7(|\boldsymbol{R} - \boldsymbol{r}/8|) | \phi_i(\boldsymbol{r}) \rangle_{\boldsymbol{r}}$$

- 1. チャネル結合計算なので、F<sub>ji</sub>は無限次まで入っている。
- 2. Up と U7 は、核カポテンシャルとクーロンポテンシャルの和。 よって核力とクーロン力は区別なく扱われている(干渉も入る)。
- 3. クーロンの多重極度は全て含まれる(核力も)。
  - ※クーロン双極子遷移のみ取り入れ、摂動の1次で止めれば、 先行研究の計算に対応する。

#### 分解反応の遷移行列

<sup>8</sup>Bの分解エネルギー(<sup>7</sup>Be-*p* 間のエネルギー)をある区間で束ねた 状態が、波数ベクトル*K*<sup>'</sup> で散乱される反応の断面積が観測され るものとする。

$$T_{j} = \left\langle \frac{1}{(2\pi)^{3/2}} e^{i\mathbf{K}_{j}'\cdot\mathbf{R}} \phi_{j}(\mathbf{r}) \left| U_{p}(|\mathbf{R}+7\mathbf{r}/8|) + U_{7}(|\mathbf{R}-\mathbf{r}/8|) \right| \Psi(\mathbf{R},\mathbf{r}) \right\rangle$$
$$= \frac{1}{(2\pi)^{3}} \int e^{-i\mathbf{K}_{j}'\cdot\mathbf{R}} \sum_{i=0}^{n} F_{ji}(b,z) \psi_{i}(b,z) e^{iK_{i}z} d\mathbf{R}$$

 $(: F_{ji}(b, z) = \langle \phi_j(\mathbf{r}) | U_p(|\mathbf{R} + 7\mathbf{r}/8|) + U_7(|\mathbf{R} - \mathbf{r}/8|) | \phi_i(\mathbf{r}) \rangle_{\mathbf{r}} )$ 



$$e^{-i\boldsymbol{K}_{j}'\cdot\boldsymbol{R}}e^{iK_{i}z} = e^{i(\boldsymbol{K}_{i}-\boldsymbol{K}_{j}')\cdot\boldsymbol{R}} \equiv e^{i\boldsymbol{q}_{ij}\cdot\boldsymbol{R}}$$

前方散乱近似を適用すると、 *q<sub>ij</sub>*の垂直成分と平行成分は、下図のようになる。



よって、 $q_{ij}$ とRの内積は、

 $\boldsymbol{q}_{ij} \cdot \boldsymbol{R} = -2K_j \sin(\theta/2)b\cos\phi_R + (K_i - K_j)z$ 

## (純)量子力学計算との対応

遷移行列の積分要素

$$I \equiv K_j \int J_0 \left( bK_j \theta \right) \left[ S_j(b) - \delta_{j0} \right] bdb$$
  
=  $K_j \sum_L \int_{L/K_j}^{(L+1)/K_j} J_0 \left( bK_j \theta \right) \left[ S_j(b) - \delta_{j0} \right] bdb$   
 $\approx K_j \sum_L \underbrace{J_0 \left( (2L+1) \frac{\theta}{2} \right)}_{\approx P_L(\cos \theta)} \left[ S_j^{(L)} - \delta_{j0} \right] \underbrace{\int_{L/K_j}^{(L+1)/K_j} bdb}_{L/K_j} = \frac{2L+1}{2K_j^2}$ 

 $K_j b = L + 1/2$ とすることで、量子力学的な表式が得られる。

$$I \approx \frac{1}{2K_j} \sum_{L} (2L+1) \left[ S_j^{(L)} - \delta_{j0} \right] P_L(\cos \theta)$$

※小さい L の S 行列のみ量子力学的に計算すれば、より正確。



- ・散乱振幅の角度依存性は、 $J_0(bK\theta)$ でほぼ表現できている。
- ・前方散乱近似を<u>やめると、余分な(強すぎる)角度依存性</u>が出る。

## 量子力学計算との対応(分解反応)

<sup>208</sup>Pbによる<sup>8</sup>B分解反応(at 核子あたり 250 MeV)の遷移振幅(実部)



#### <sup>8</sup>B 分解断面積の角分布



実験値と理論計算値の"比"から、<sup>8</sup>B波動関数の漸近係数 *C* を得ることができる。*C*が得られれば、*S*<sub>17</sub>(*E*)が描ける。

#### <sup>7</sup>Be(*p*,*y*)<sup>8</sup>B 天体核物理因子*S*<sub>17</sub>



#### <sup>7</sup>Be(*p*,*y*)<sup>8</sup>B 天体核物理因子*S*<sub>17</sub>



### <sup>7</sup>Be(*p*,*y*)<sup>8</sup>B 天体核物理因子*S*<sub>17</sub>



間接測定法は、<u>正確な反応理論と組み合わせれば</u>機能する。

## E-CDCCとその天体核反応への応用のまとめ

- ・天体核物理学上の重大な課題である S<sub>17</sub>問題を紹介した。
- ・不安定核<sup>8</sup>Bの分解反応を、<sup>7</sup>Be+*p*+標的核の3体反応模型に基づいて記述した。
- ・CDCCとアイコナール近似を組み合わせたアイコナールCDCC (E-CDCC)を紹介した。
- ・E-CDCCに対する量子力学的補正は最小の手間で実行可能。
- ・反応解析により、S<sub>17</sub>問題を解決することに成功した。